

北九州市立大学

文学部紀要

第91号

オーサーシップの漂流

—エレナ・ポニアトウスカ『レオノーラ』のインターテクスチュアリティをめぐって—

富田 広 樹 ……………37

北九州市立大学文学部

比較文化学科

2021

JOURNAL
OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
No. 91 March 2021

CONTENTS

La autoría naufragada.

Leonora de Elena Poniatowska o la ficción dentro y fuera de la ficción

Hiroki TOMITA37

The Department of Comparative Culture
The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
2021

オーサーシップの漂流

—エレナ・ポニアトウスカ『レオノーラ』のインターテクスチュアリティをめぐる—

富田 広樹

この文章を書いたのは、果して両者のうちのどちらであったのか。

ホルヘ・ルイス・ボルヘス

「ボルヘスとわたし」『創造者』鼓直訳

要旨

エレナ・ポニアトウスカの小説『レオノーラ』は、その主人公であるレオノーラ・キャリントン本人の作品とも密接な関係を有している。その多重にして有機的な結合が、ひとつのテキストを読みながら、同時にべつのテキストを読ませることを可能にする。キャリントンの「ちいさなフランシス」を例に、両者のテキストの関係を明らかにする。

キーワード

エレナ・ポニアトウスカ、レオノーラ・キャリントン、『レオノーラ』、
オーサーシップ、インターテクスチュアリティ

はじめに

オーサーシップをあたかも自明にして不動のものと考えることには、危険がつきまとう。書物の標題とならんで、本の表紙に著者の名が記されるようになったのは比較的新しい慣習にすぎない。「誰がそれを書いたのか」ということが問題にされないまま、あるいは問題にすることを避けながら、書物が流通した歴史もまた当然にしてある。

火、水、ガスと熱気、埃と粗略、無知と偏狭、紙魚、害獣と害虫、製本屋、蒐集家、召使と子供。一九世紀イギリスの書誌学者ウィリアム・ブレイズは書物の敵をこのように数えあげた。物としての本はもろく、さまざまな事情から表紙を持たない書物もおおい。手稿にあつては特定の情報を含んだ一葉が散逸してしまえば、作者不詳のテキストが容易に誕生することになる。

盗作や剽窃、あるいはゴーストライターによる執筆があるいっぽうで、作家自身が変名や複数の名義で作品をものす場合もあり、ステイブン・キング、パトリシア・ハイスミス、フェルナンド・ペソアなど、その例は枚挙に暇がない。覆面作家の存在や筆名の使用も同種の問題を孕んでい

る。ひとりの人物と目されていた作者が複数である場合もあれば（エラリー・クイーン、バーナビー・ロス）、作者以外の人物がテキストに手を入れたケースもある（レイモンド・カーヴァー）。

統計的手法によって、書き手の^{フィンガープリント}指紋¹を検出することが高い確率で可能であることは証明されている。しかし、そのフィンガープリントの特徴を逆手にとって文体模写、パステイーシュといった高度な手わざを实践する巧者もある（清水義範、ウンベルト・エーコ）。また、そのようなフィンガープリントを消すことを意図せずとも、ことなる文体が発生してしまうケースもあるだろう。

ゼロ年代SFの傑作のひとつと目される『虐殺器官』を世に送りだした伊藤計劃は二〇〇九年に物故したが、冒頭部分のみを遺して未完の絶筆となった『屍者の帝国』について、親交のあった円城塔が引き継ぎ二〇一二年に完成した。円城にして、伊藤の文体を意識することがなかったということはあるまいが、「『伊藤計劃風』を無理に目指すことよりも、その可能性を発展させる方向へ進めることも、一つの大きな目標でした」と語っている¹。できあがった作品は伊藤計劃のものとも円城塔のものとも言いしれぬ文体を有する、言語哲学と^{ペダントリ}術学趣味、世界史と世界文学を接続するテキストだった。

これらが形而下の問題であるとして、形而上ではどうか。ホルヘ・ルイス・ボルヘスのすぐれた短篇「『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール」のつぎのくだりは、たんなる冗談以上の問題をはらんでいるように思われる。

メナールの『ドン・キホーテ』とセルバンテスのそれとの比較は教えるところが多い。たとえば、セルバンテスは次のように書いている（『ドン・キホーテ』第一部第九章）。

…… 真実、その母は歴史、すなわち時間の好敵手、行為の保管所、過去の証人、現在の規範と忠告、未来への警告。

十七世紀に、「無学の天才」セルバンテスによって書かれたこの列挙的な文章は、歴史への単なる修辞的な讃辞でしかない。ところが、メナールはこう書く。

…… 真実、その母は歴史、すなわち時間の好敵手、行為の保管所、過去の証人、現在の規範と忠告、未来への警告。

¹ 円城塔「あとがきに代えて」『屍者の帝国』（河出書房新社『死者の帝国』特設サイト）（<http://www.kawade.co.jp/empire/>）（二〇二一年一月一日閲覧）

歴史、真実の母。この考えは驚嘆に値する。ウィリアム・ジェイムズの同時代人であるメナールは歴史を、真実の探求ではなく、その源泉と規定する。歴史的眞実は彼にとって、かつて起こったことではない。かつて起こったとわれわれが判断するところのものだ。末尾の句——現在の規範と忠告、未来への警告——は臆面もなく実用的である。

文体の対照もまた甚だしい。メナール——彼は結局、外国人である——の擬古的な文体にはある気取りが見られる。先駆者の文体にはそれがなく、その時代の普通のスペイン語を自在に操っている²。

作家の同時代人である虚構のフランス人小説家は、ミゲル・デ・セルバンテスの『ドン・キホーテ』と一字一句一致するページを生み出すという野心を抱いた。引用されている断片（「……眞実、その母は歴史」）はまったく同一のものでありながら、ことなる解釈が引き出されている。

つまるところ、オーサーシップにかんする概念は書き手のもとをはなれて、読書の行為者である読み手の問題へとすり替わっている。創作と同様に、読書もまた創造的な行為である。すくなくとも、批評という地平においてそれはじゅうぶんに受け入れられるものだろう³。

かくまでもオーサーシップにつきまとう不定性を確認したうえで、ここではひとりの作家の挑戦について検討してみたい。エレナ・ポニアトウスカによる『レオノーラ』である。そこで読者は、ひとつのテキストを読むと同時にまたべつのテキストを読むという奇妙な体験をすることになる。

エレナ・ポニアトウスカ『レオノーラ』

エレナ・ポニアトウスカは一九三二年五月一九日、公女エレヌ・エリザベス・ルイーズ・アメリ・パウラ・ドロレス・ポニアトウスカ・アモールとしてパリに生まれた。ポニアトウスカという名字が示すとおり、一八世紀ポーランド・リトアニア共和国（ポーランド王国およびリトアニア大公国）の王となったスタニスワフ・アウグスト・ポニャトフスキ（スタニスワフ二世アウグス

² ホルヘ・ルイス・ボルヘス『『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール』『伝奇集』鼓直訳、岩波文庫、一九九三年、六五―六六頁。

³ それでも、この問題意識は容易にオーサーシップに絡め取られる。そして読者はふたたび馴致され、作者が周到に準備した企みのなかで安堵しながら言語に内在する自己言及性を体現するテキストの戯れを堪能するばかりということになる。それこそがメタフィクションの限界であることを批評家、佐々木敦は指摘している。

「作者性」への反省、批判、解体を企図しているかに見えて、その実、やればやるほど「作者」の権能と専制を確認し強化することになってしまう。〔中略〕なるほど確かに、従来のテキスト論や受容理論なども「読者／読むこと」を大いに問題にしてはきた。だが、読みの深さであるとか、読みの多様性などといった次元にフォーカスしていくことで、いうなればそれらは「（作者に成り代わって）もう一度書くこと」としての「読むこと」を志向しており、その意味では「読者」の名の下に「作者性」を奪取するという構図になっている。（佐々木、一七七―一七八頁）

ト、在位一七六四―九五年)の家系に連なる(スタニスワフの兄、カジミエシュの直系の子孫にあたる)。母方の家系であるアモール家もまたメキシコの名家で、メキシコ革命によって土地を失うと国外に亡命した。ポーランド系フランス人の父とフランス生まれの母のあいだに生まれたポニアトウスカにとって、そもそもの母国語はフランス語であった。

第二次世界大戦の勃発とともにパリを、そしてフランスを離れた一家はメキシコへと移住する(父親はフランス市民として従軍しており、戦争終結後に合流)。エレナはここではじめてスペイン語に出会う。一九四九年にはアメリカ合衆国に送られ、カトリック系修道会が運営する学校に学んだ。帰国後、秘書として働いたのち、新聞『エクセルシオル』でジャーナリストとしてのキャリアをスタートする。一九六八年にメキシコでおこった、学生運動にたいする政府の暴力的介入と虐殺事件を扱った『トラテロルコの夜』(一九七一年)はベストセラーとなった。著名人へのインタビューやジャーナリストとしての活動のほかに、創作においても高い評価を得て数多くの文学賞を受けている。

イギリスの上流階級に生まれ、シュルレアリスムの芸術家たちと交流を持ったのち、メキシコへ移住したレオノーラ・キャリントンとポニアトウスカは、五〇年代より親交を結んだ。この芸術家を題材とした小説『レオノーラ』は二〇一一年にスペインの出版社セイス・バルが主催する未発表の長編小説を対象とした文学賞、ビブリオテカ・ブレベ賞を受けた。選考委員会は全員一致で『レオノーラ』を選出、「国際色豊かな舞台上に卓越した言葉の資源を用いて、エレナ・ポニアトウスカは二〇世紀の夢と悪夢が具現化した世界を攪乱する女性の姿を構築する」と評した⁴。

末尾に置かれた「謝辞」でポニアトウスカは、この作品を「いかなる意味でも伝記であることを望まない」小説であるとし、「不世出の芸術家への自由な接近」と呼んでいる⁵。なお、本書刊行の時点でレオノーラ・キャリントンは存命であった。あるひとつの実像(それは無数の虚像のうちのひとつにすぎない)を提示しようとする狭義の伝記としての性格をこの作品に認めるとすれば、それは当然にして間違っている。にもかかわらず、ある時点まで読者は描写の細密さに「リアル」なものであるという錯覚をおぼえるかもしれない。詳しい、というよりも、詳しくすぎることによってそれが真実でない、ということに思いついたまでのわずかな時間、読者は自分が読んでいるものが小説であることを忘れてしまう。

たとえば、サン・マルタン・ダルデシュでのレオノーラとマックス・エルンストの生活の様子は、その描写が微に入り細を穿つものであるという印象を与える。では、これが「リアル」であるか、といえ、かならずしもそうではない。じつはその内容は、のちに詳しく検討するようにキャリントンの短編「ちいさなフランシス」に基づいている。当のポニアトウスカがあるインタビュー

⁴ Citado en Ordaz, Pablo. “La locura de vivir.” *El País*. 19 de marzo de 2011. 拙訳。

⁵ エレナ・ポニアトウスカ『レオノーラ』富田広樹訳、水声社、二〇二〇年、五三九頁。

でこうした事実に言及しているので引いておこう。

この本にはどれくらいのフィクションがあり、どれくらいの真実があるのでしょうか？

ああ、そうね、たくさんのフィクションを入れているわ。小説にはたくさんの会話が出てくるけれども、そんな会話はじっさいにはなかった……。わたしは神様が教えてくれるように書くだけ、自分にできることをする、空中にそれを並べていくの……。この本には長い年月にわたって彼女が語ってくれた多くのことを含めたけれど、同時に彼女が書いたたくさんのものも含めたの。彼女は偉大な作家よ。九冊のすばらしい本、演劇作品、短編を書き、すべての短編が彼女自身とかかわりを持っているわ。だから、そうしたものの断片をすっかり持ってきて小説に含めることはとても簡単なの。それがわたしのしたこと、このうえない情熱をもってしたことよ⁶。

ポニアトウスカはキャリントンのさまざまなテキストを換骨奪胎してその人生を創作し、「自由な接近」を試みている。いくなれば、レオノーラによる創作を素材として、レオノーラをめぐる物語をあらたに産み出している。作り物が作る行為^{フィクション フィクション}によって解体され、またべつ^{フィクション}の創作物に生まれ変わる。ホルヘ・ルイス・ボルヘスの『『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール』よろしく、今まさに手にしているテキストを書いたのはいったいポニアトウスカなのか、キャリントンなのか、まるでわからなくなってしまう。ポニアトウスカは「とても簡単」と言っているのけるが、『レオノーラ』はそのような超絶技巧で書かれた小説である。

すでに引いた「謝辞」でポニアトウスカは、「ちいさなフランシス」、「石の扉」、「恐怖の館」、『フランネルの寝間着』、『卵型の貴婦人』、『耳ラッパ』、『第七の馬』といったキャリントンの作品に言及している。作品冒頭にあってもおかしくないこの謝辞が、巻末に置かれているのはやはり意図的なものであり、ポニアトウスカはテキストの戯れに読者が遊ぶ自由こそを尊重したかったにちがいない。しかし、同時に揺蕩^{たゆた}っているのはオーサーシップでもある。キャリントンの作品に親しんでいる読者にとっては、ページを繰るごとに彼女の作品を重ね合わせて読むことになるだろう。問題としたいのは、この特異な文学空間が単純な引用や翻案によって構築されているのではないということである。

⁶ Ordaz, Pablo. “La locura de vivir.” *El País*. 19 de marzo de 2011. 拙訳。

『レオノーラ』と「ちいさなフランシス」

すでに名を挙げた「ちいさなフランシス」は、ポニアトウスカの謝辞でも筆頭に置かれた作品だが、原語である英語で出版されるまでには長い時間を要した。

Little Francis. Written 1937-38, in English, in Saint-Martin-d'Ardèche. First published in French, under the title *Histoire du Petit Francis*, in a version edited and translated by Jacqueline Chénieux, as part of a collection entitled *Pigeon Vole*. Editions Le Temps Qu'il Fait, Cognac, France, 1986. First edition: 1,000 copies.⁷

一九三七年から翌年にかけて執筆されながら、最初の出版はフランス語に訳された作品集に収められてのことであった。その二年後、執筆からほぼ半世紀が過ぎてようやく英語での出版にいたった。

ポニアトウスカが謝辞に挙げたもの以外にも『レオノーラ』に巧みに取り込まれているキャリントン作品は数多く、一章分に相当する内容から登場人物の固有名にいたるまで、その例は枚挙に暇がない。『レオノーラ』六章でレオノーラが母親のフランス語はオランダの牝牛が話しているみたいと言うセリフは“My Mother is a Cow”、一三章以降で登場するサン・マルタン・ダルデシュのシリル・ド・ガンドル子爵は“Monsieur Cyril de Guindre”に由来し、三三章の「白ウサギ」は章全体が“White Rabbits”という短篇に基づいている。

だが、質と量双方の側面からいって「ちいさなフランシス」がもっとも重要な作品であることはいうまでもない。したがって、どのように「ちいさなフランシス」の換骨奪胎がなされているかを検討することが、『レオノーラ』という作品テキストの特異性に接近する近道となるだろう。

ここでの関心は典拠や引用元を探すことにはない。そうではなくて、誰がそれを書いたのか、誰の書いた文章を読んでいるのか、ということが根幹より揺さぶられる経験を可能にするテキストがいかに織り上げられているかを明らかにすることにある。

異様な「リアル」さをたたえるものとしてすでにふれた、サン・マルタン・ダルデシュでのレオノーラとエルンストの生活の一場面を「ちいさなフランシス」と比較してみよう。

⁷ Carrington, Leonora. *The House of Fear: Notes from Down Below*. London: Virago, 1989. 216.

『レオノーラ』

Leonora se sienta en la orilla del río, y se lava los dientes. Algunos pecesillos desayunan pasta dental y beben saliva. Si levanta la vista, alcanza a ver un pueblo que crece sobre la montaña, blanco por sus casas y negro por sus cipreses. [...]

—¿Qué puedo amar más en el mundo que piedras calientes y agua? —murmura acariciando su vientre—. Qué suave vida estamos viviendo, Leonora, me gustaría atrapar algunos de estos pececitos y freírlos —continúa con una sonrisa cruel—. Les echas limón y truenan entre tus dientes. Tengo hambre, ve a abrir la caja de latón y saca el queso. Trae los tomates y pan. ¡Ah!, y no se te olvide el vino.

—¿Se te ofrece otra cosa?⁸

「ちいさなフランシス」

Francis sat on the edge of the pool where it was shallow, washing his teeth. Little fishes breakfasted on the toothpaste and saliva that he spat into the water. He was thinking about the warmth and the water around him and the other village, not Saint-Roc, that grew from a high cliff, upriver. It was white with towers and black with cypress trees but seemed deserted. [...]

“What in the world do I love more than warm stones,” he murmured, caressing his belly. “And water? What a sweet life we are living, Francis. I would like to catch some of those little fish and fry them. They’re very good to eat.” He continued with a cruel smile, “You sprinkle them with lemon and they crackle between your teeth. I feel hungry now. Go and get that cheese from the tent. There are some tomatoes too and some bread in the tin boxes; the wine is in the pool near the tent.” He closed his eyes.⁹

類似が明らかであると同時に、キャリントンのテキストにない要素をポニアトウスカが付け加えていることもわかる。キャリントンのテキストを下敷きに、登場人物のひとり（フランシス）をキャリントンに作り変え、マックスと会話させている。この作品の執筆年代が、キャリントンとエルンストのじっさいにサン・マルタン・ダルデシュで生活していた時期（一九三七年から翌年にかけて）に一致していることから、ポニアトウスカはウブリアーコ叔父とフランシスという年のはなれた同性のカップルがエルンストとキャリントンの関係をなぞっていることを見抜いたうえで、この場面を作りあげている。

これだけでも卓抜した手わざといえるが、ポニアトウスカの辣腕はとどまるところを知らない。サン・マルタン・ダルデシュでの暮らし以外の場面にも、「ちいさなフランシス」の細部が『レオノーラ』の数多くの章に登場するのだが、それは看過されかねない、ささいな場面においてあらわれるのである。『レオノーラ』の第一章ですでに、「ちいさなフランシス」の断片を見つけることができる。

⁸ Poniatowska, Elena. *Leonora*. Colección Booket, Barcelona: Seix Barral, 2012. 116.

⁹ Carrington, Leonora. *The House of Fear: Notes from Down Below*. London: Virago, 1989. 79-80.

『レオノーラ』

La cocinera, vieja y amarilla, encogida al lado de la estufa, espera a que hierva el caldo. Su hija, que le sirve de galopina, le dice que si se siente mal, en el nombre de Dios, vaya a acostarse; ella puede suplirla perfectamente.

—Todo el día te quejas, mamá.

—¡Mula! —grita la cocinera—. ¡Me pudro de dolor y no me compadeces!

—¿Por qué mejor no te cuelgas? Hay muchos árboles afuera y la cuerda es barata.

—Debería haberte ahogado cuando naciste— responde la vieja arrugada de furia.¹⁰

「ちいさなフランシス」

Her old mother was crouching by the fire, her flat yellow face twisted with rage.

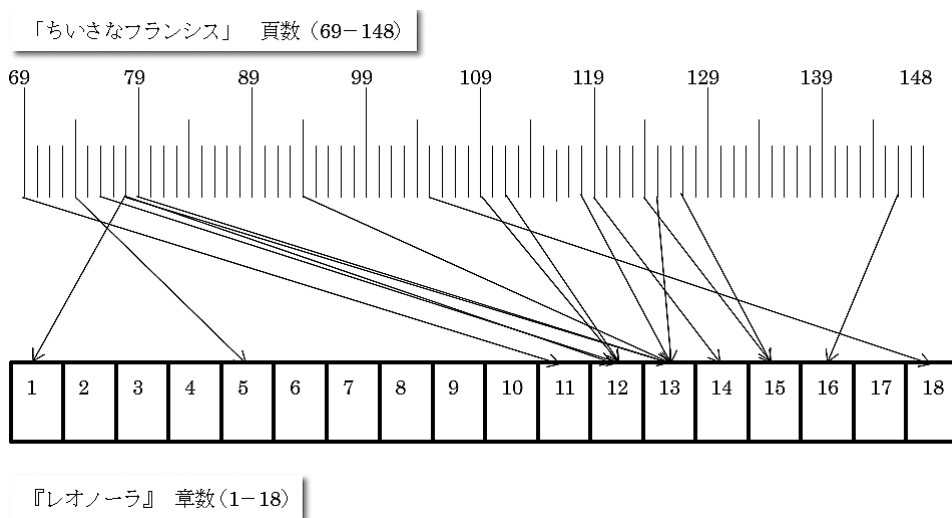
“Why, in the name of God, don’t you go to bed instead of pitying yourself beside the fire all day?”

“Salope!” screamed the crone. “My poor stomach is putrifying with pain and you make my life a misery.”

“So much the better,” returned Rosaline, loud but without ill feeling. “Why don’t you hang yourself then? Better people than you have hanged themselves before now. There’s a tree outside and rope is cheap.”

“You send a poor suffering old woman to her death! While I bore you in my belly, I ought to have drowned myself! Before it was too late.”¹¹

こうして明らかになるのは、キャリントンによって書かれたものを用いて彼女について書くというレベルとはべつに、キャリントンの作品の細部を散りばめることでイギリス出身の芸術家の文業から有機的かつ自律的な小説世界が構成されているという事実である。「ちいさなフランシス」を例にとって、その細部がどのように張り巡らされているかを示したものが、以下の図である。



¹⁰ Poniatowska, Elena. *Leonora*. Colección Booket, Barcelona: Seix Barral, 2012. 15-16.

¹¹ Carrington, Leonora. *The House of Fear. Notes from Down Below*. London: Virago, 1989. 78-79.

すでに述べたとおり、「ちいさなフランシス」はキャリントンがマックス・エルンストとサン・マルタン・ダルデシュで生活した一九三七年から三八年にかけて執筆されている。登場人物フランシスをレオノーラと読み解くことで、ポニアトウスカは二人の芸術家の生活の様子に生き活きとした細部を盛り込んでいる。その意味では、キャリントンのサン・マルタン・ダルデシュ時代に相当する『レオノーラ』一二章以降にその断片がおおく見受けられるのは当然だろう。驚くべきは、上の図における矢印の交差である。これらはキャリントンのテキストを昇華して、あらたな文学テキストを生み出すという試みにおける、有機的結合の痕跡である。「ちいさなフランシス」ひとつとしてそうであるならば、『レオノーラ』という作品全体を通じて織りなされる物語は、多重構造を持つよりほかない。複数の次元でキャリントンの筆になる複数のテキストと呼応する小説として『レオノーラ』が書かれているならば、意識的にであれ、無意識的にであれ、さまざまなパラレル・ワールドを往還しながら読者はそのプロットを追っていくことになる。ある物語を読みながら、同時にべつの物語を読むことになるという特殊な読書経験を可能にするテキストは、この矢印の交差によってもたらされているのである。

『レオノーラ』のなかのポニアトウスカ——むすびにかえて

しかしながら、表面的に見れば『レオノーラ』はキャリントンの書き物を反映したレオノーラの物語、つまりフィクションをも題材としながら、^{レオノーラ}彼女自身による^{レオノーラ}彼女の物語を再構成したにすぎないのだろうか。そうではない。レオノーラ・キャリントンについて書くことをつうじて、ポニアトウスカは彼女自身の物語をも執筆していると言えるのである。

キャリントンとポニアトウスカが一九五〇年代より親交を結んだことはすでにふれた。ともにヨーロッパに出自を持ち、上流階級に生まれたふたりの女性の交流は緊密なものであった。キャリントンの晩年、さまざまな機会でポニアトウスカが彼女に付き添ったことは「謝辞」にも述べられている。

最終章「死とはどういうものかしら？」ではレオノーラの自宅に押しかけ、彼女を翻弄しつつ新しい世界を発見させる娘ペピータが登場する。年の離れたふたりの女はつぎのような会話を交わす。

「マックスはあなたが人生で一番愛した人なのね」

「わからないわ、愛はそれぞれ別物だから」¹²

¹² エレナ・ポニアトウスカ『レオノーラ』富田広樹訳、水声社、二〇二〇年、五二三頁。

この会話は、「謝辞」でポニアトウスカが回想するキャリントンとのやりとりを完全になぞっている。

「あなたの恋の話を聞かせて」と彼女〔キャリントン〕は言ったものだ。自分の恋については話したがらず、マックス・エルンストが人生最大の愛だったのかとわたしが尋ねると、こう答えた。「愛はそれぞれ別物、あんまり個人的な話はよしましょう」¹³

この点を考慮すると、ペピータをポニアトウスカとして読むこともまた可能となる。しかし、そのように具体的な登場人物としてではなく、ポニアトウスカは自身の声をレオノーラの物語に埋めこんでいる。

メキシコに根を下ろすことによってレオノーラ・キャリントンは二〇世紀後半にこの国を見舞うこととなったふたつの凄惨な出来事、すなわち一九六八年の政府による学生運動の弾圧と一九八五年のメキシコ地震を身近に経験する。

オリンピック開催を目前にしたメキシコで、政府に対する不満を表明する学生たちの運動は高まりを見せていた。一九六八年一〇月二日、トレス・クルトゥラス広場に集結した一万を超える学生と市民に対し軍と警察が発砲、数百人の死者が出る大惨事となった。言論の自由を奪われ、身柄を拘束、収監された人間、また行方不明となった人間の数は数え切れない。ポニアトウスカの名を高からしめた『トラテロルコの夜』は、圧倒的な暴力によって学生の声を沈黙させ、市民生活を恐怖で震撼させたこの事件にかんするルポルタージュだが、一切の解釈を差し挟むこともなしに、発話の文脈も欠いたまま列挙される証言の数々を前にすれば、これはむしろ無数の声の集積と呼ぶべきものであろう。

あくまで中立に徹し、客観的に事件を記録しようとするその試みにあつては、ポニアトウスカ自身の声もまた無数の声のなかのひとつとなる。一九六八年、彼女は弟ジャンを交通事故で喪^{うしな}うのだが、その死すらも特別扱いされることはない。姉弟が交わした言葉も、運動にかかわりを持つ学生を心配する家族のやりとりのひとつにすぎない。

『レオノーラ』のなかのひとつの章の標題「ディアス・オルダス、チン、チン、チン……」はデモで聞かれた掛け声のひとつであった。レオノーラ・キャリントンもエレナ・ポニアトウスカも、ともにこの事件を経験した。ガビーとパブロ、ふたりの息子の心配をするキャリントンが、弟ジャンの心配をするポニアトウスカと重なり合うのは当然のことだろう。

『トラテロルコの夜』で採用された、文脈の説明なしに無数の声が羅列されていくという独特な

¹³ エレナ・ポニアトウスカ『レオノーラ』富田広樹訳、水声社、二〇二〇年、五三八頁。

手法は、メキシコ地震を扱った『なにもない、誰もいない』（一九八八年）にも引き継がれることとなった。一九八五年九月一九日、太平洋岸でマグニチュード八・〇の地震が発生。震源から遠く三五〇キロ離れたメキシコシティはテスココ湖を埋め立てて建設された都市だが、湖底の固い地盤に地震波が共鳴し、増幅されることにより液状化現象が発生した。正確な死者数は把握されておらず、五千とも四万とも言われる。数多くの建物が倒壊し、生き残った人びとも帰る家を失った。

圧倒的な暴力や、なすすべもない災害の悲惨を前にして、悲しみに打ちひしがれる人びとの声に耳を傾けること、それはジャーナリストとしての彼女が有した天稟^{てんびん}であっただろう。しかし、中立性を重んじるがゆえに、彼女自身の声もまた無数の声のなかにあって見分けがつかなくなってしまった。

レオノーラ・キャリントンをめぐる物語を生み出す過程においてポニアトウスカは自分自身の声をおなじメキシコという国で味わった経験を、彼女に託すかたちで掬いあげることとなった。互いのテキストでもって、互いの物語を紡ぎ出す。わかちがたく結ばれたふたりの女の交流が、オーサーシップの定位に揺さぶりをかけ、いっぽうを読むことが他方を読むことをつねに要請するテキストを生み出したのである。

参考文献

欧文

- Carrington, Leonora. *The Complete Stories of Leonora Carrington*. Dorothy: St. Louis, Missouri, 2017.
- . *The House of Fear. Notes from Down Below*. Tr. Kathrine Talbot and Marina Warner. London: Virago, 1989.
- Gras Cruz, Irene. “Angelina Beloff y Leonora Carrington bajo la mirada de Elena Poniatowska.” *Dossier Feministes*. Núm. 20 (2015). págs. 101-121.
- Ordaz, Pablo. “La locura de vivir.” *El País*. 19 de marzo de 2011.
- Poniatowska, Elena. *Leonora*. Colección Booket. Barcelona: Seix Barral, 2012.
- Rubio Rossell, Carlos. “Vivir para contarlo.” *Mercurio*. Núm. 160 (abril, 2014). págs. 8-12.
- Vega Zaragoza, Guillermo. “La vida: Manual de desobediencia [reseña].” *Revista de la Universidad de México*. Núm. 89 (2011). págs. 92-93.

邦文

- 伊藤計劃、円城塔『屍者の帝国』河出書房新社、二〇一二年。
- エーコ、ウンベルト『ウンベルト・エーコの文体練習 完全版』和田忠彦訳、河出文庫、二〇一九年。
- キャリントン、レオノーラ『恐怖の館』野中雅代訳、工作舎、一九九七年。
- 『耳ラッパ』野中雅代訳、工作舎、二〇〇三年。
- 佐々木敦『あなたは今、この文章を読んでいる。パラフィクションの誕生』慶應義塾大学出版会、二〇一四年。
- スクレナカ、キャロル『レイモンド・カーヴァー 作家としての人生』星野真理訳、中央公論新社、二〇一三年。
- 筒井康隆『モナドの領域』新潮社、二〇一五年。
- 野中雅代監修『レオノーラ・キャリントン展〔図録〕』東京新聞、一九九七年。
- ブラット、ベン『数字が明かす小説の秘密』坪野圭介訳、DU BOOKS、二〇一八年。
- ブレイズ、ウィリアム『書物の敵』高宮利行監修、高橋勇訳、八坂書房、二〇〇四年。
- ポニアトウスカ、エレナ『トラテロルコの夜』北条ゆかり訳、藤原書店、二〇〇五年
- 『レオノーラ』富田広樹訳、水声社、二〇二〇年。
- ボルヘス、ホルヘ・ルイス『『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール』『伝奇集』鼓直訳、岩波文庫、一九九三年、五三-六九頁。
- 松本健二「エレナ・ポニアトウスカを読むために」『Estudios Hispánicos』二八号（二〇〇四年）八三-一四〇頁。